






幽霊船長と赤い人魚

Where is my Captain hat?



西へむかった我らが船は
ある遠洋で消息を絶つ
船出を見届けた人々は
無事に港へ帰らんと
月に祈るよりほかないのであった

inception

船長の災難

放り出された銀波の水面

ジンライム色の魚たち 我を失い大渋滞

「方向感覚が狂っちゃった! 群れをはぐれてしまうじゃないか。」

そのすさまじいどよもしに

両手両足 なすがまま

がんじがらめのどさくさに

あはれ 誇り高き船長のキャプテンハットが奪われた





Another world

約束の岸辺

「まぶしいほどの青空だ。」

目覚めて船長が見たものは悩ましいくらい静かな世界

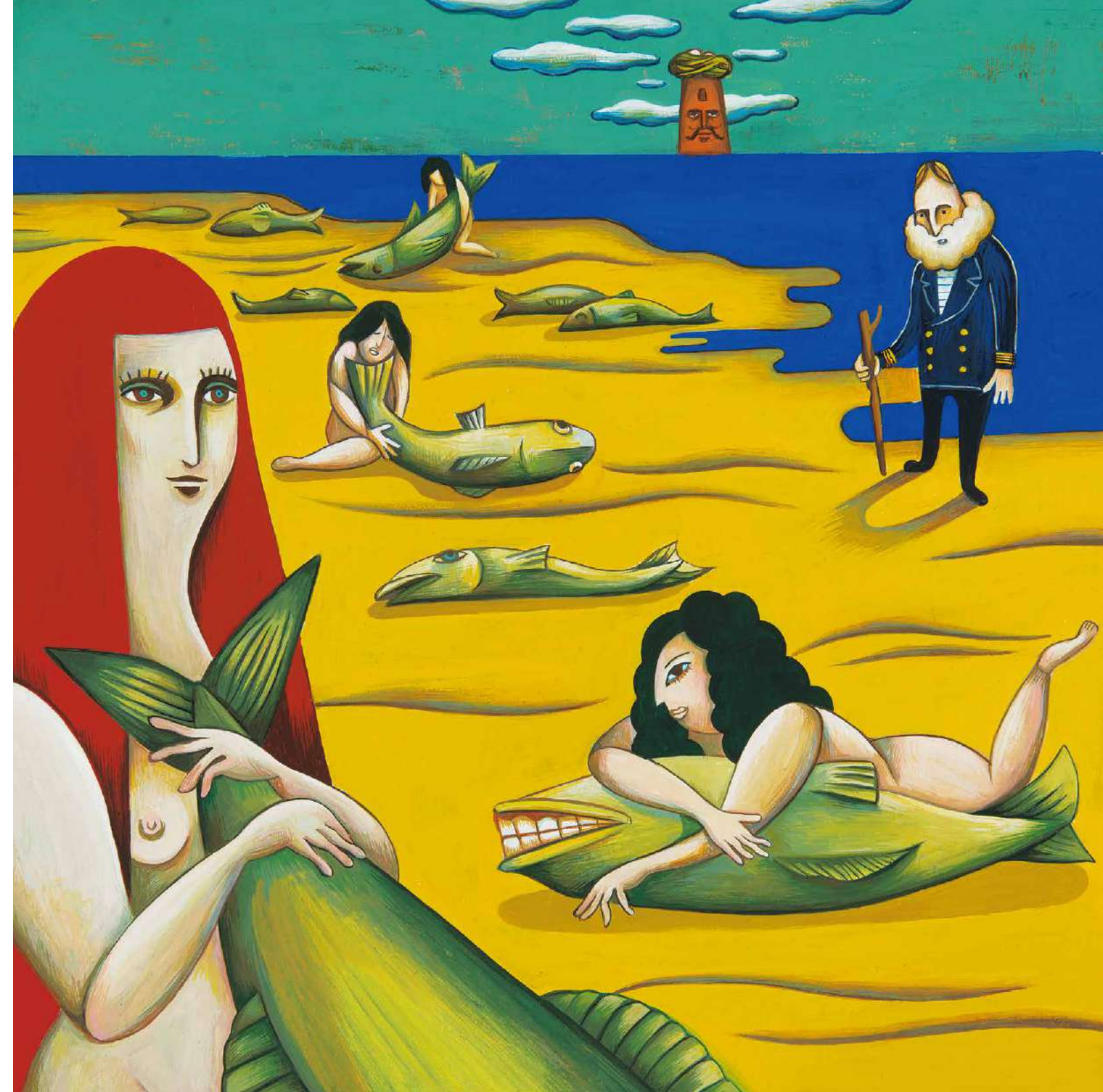
「もしや、ここは我々が夢にまで見たこの世の果てか？」

死んだ魚をあさる女は 生まれたままの姿で微笑う

うっとり火照るピンクの指が しっぽのほうをしっかりと抱いて

たったひとつだけ海の向こう この空に染みを作るのは

孤島のようにそそりたう 不気味な塔の不敵なまなざし





この世界には掟おきてがあって 女はあまねく人魚となった
魚をさばくめくらの職人 なれた手つきで仕事をこなす
「おまえが罪を償つぐなうために俺は雇われているだけさ。
なんという生臭ちあい。血合ちあいも抜いてやりましょう。」

それを見ていた船長は両足捧げた人魚の中で
ひとり赤毛の女を見そめ 黒いひつき柩を失敬した

のちに船長はこう語る
「旅の恥はかきすて。すけない財宝みうで身請けしたのさ。」



人魚となった女たち 貧しい船でどんぶらこ
それはあらたな旅のはじまり 芸妓のお披露目のようだった
神の宴に捧げるおみや でっかい卵を取り囲み
まるで聖歌隊のように 誇らしげに 唄ってるんだ

「オーハッピーデイ! 憧れの楽園へ船出する、異形の私。
別れはちょっとつらいけど、泣いてなんかいやしない。
おあつらえむきのこの身体、どうぞあなたのごひいきに。」

じっとみつめる大きな鳥はだいたい色のうつろな目





Watch Tower

境界線の男

そのてんまつを見張塔でひっそりと 望遠鏡で見ていた男

ぐるぐる巻きの包帯はひどい火傷やけどを負っているから

彼はつがいの鳥を従えて ひがな世界の風を読む

かつて遊んだ海をながめて 祈るように呟いた

「おまえのように翼があれば、人魚のように泳げるならば、あの海を越えてゆけるのに……。」

塔のいただきにある鳥たちの休息所

そこでは新しい命が春を待っていた





ある日 塔に帰っためんどりが濡れた帽子をくわえてきた

「喜びなさい、旦那様!今日は収穫がありました。

お待ちかねの探しもの、やっどめつけてまいりました。」

顔をなくした孤独な男 その魂に光が射した

「恋人を迎える準備が整った。看護婦さん、例の仮面を僕に用意してくれたまえ。」

Honeymoon

新しい暮らし

かたや帽子を奪われた船長は 赤い人魚と暮らし始める

彼女のからだは 繊細だった

魚のほうの半分が 乾くと血の気が失せるのだ

「こりゃ、たいへんだ。一晩中、潤いを与え続けねば!」

濡れたふきんでモイストチャー

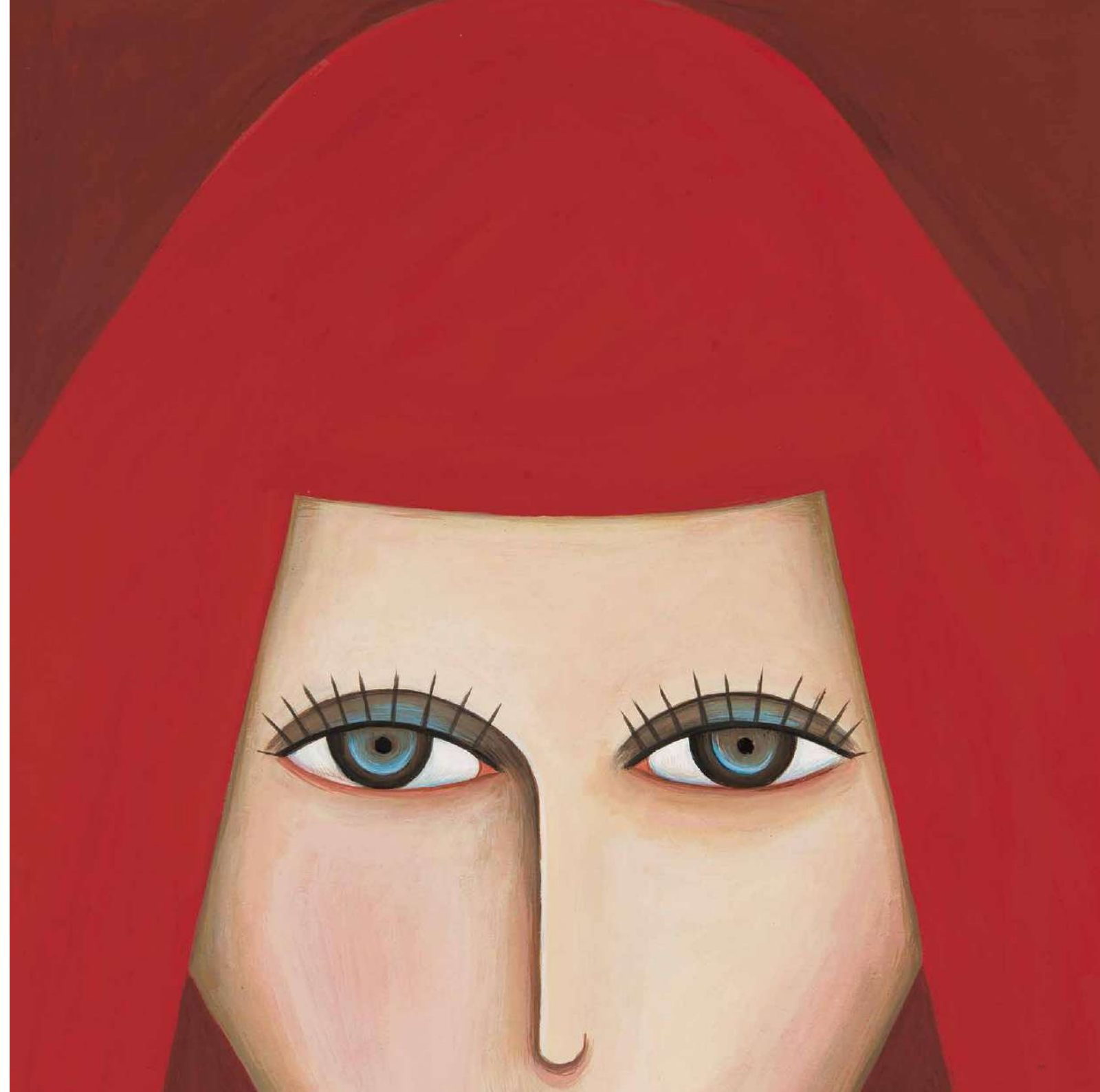
けなげに励む背中には かつての威厳は見当たらないが

人魚はとても満足そうだ

じっとみつめる赤毛の珍種

この世の未練を引き受けて すべての未来を見透かすような

預言者のような不思議な眼まなこ



船長の回想

「それは穏やかな暮らしだった。

赤い人魚はそれほど多くを語らなかった。

恋人のように抱き合っても、心は手の届かない場所にあるようだった。

それでも俺は安息の地を得たように、不思議とくつろいでいたものさ。

反面、その平穏で甘美な毎日に不安も感じていたんだ。

このまま、ここに安住すれば、元の世界には戻れないかもしれない。

キャプテンハットも失くしちゃって、さらに俺はおいぼれつつあるが

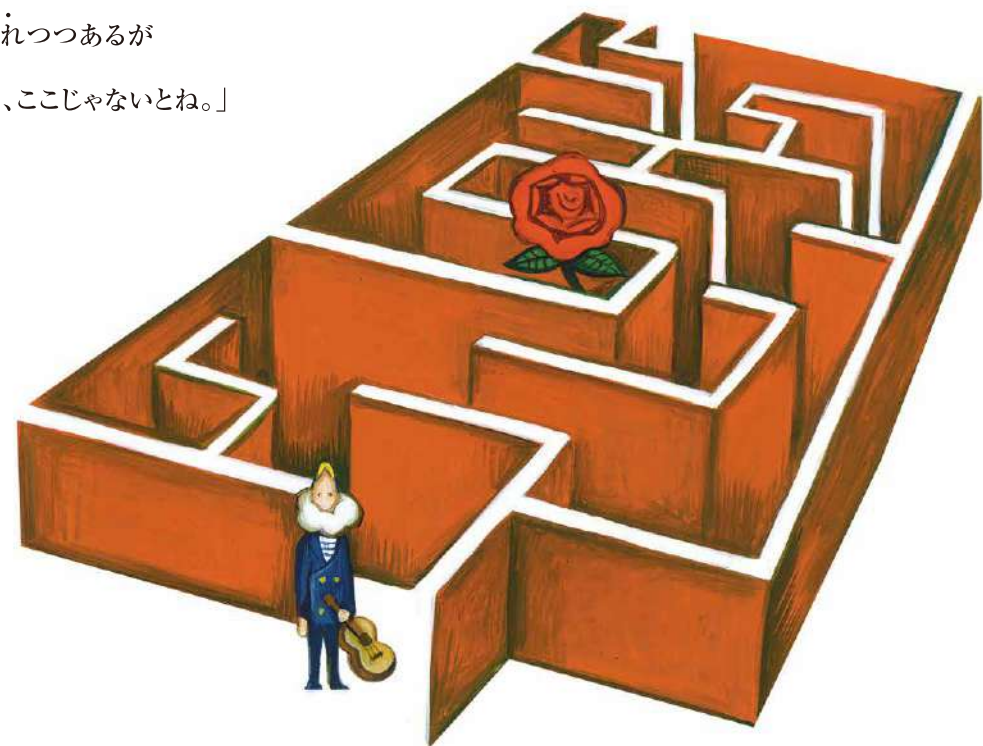
冒険の旅はまだ終わっちゃいない。この世の果ては、ここじゃないとね。」

ふたりはやがて契り^{ちぎ}を交わす

真っ赤に染まる 富士の山

やわらかい夢に漂うように

赤い盃^{さかずき}で浴びる彼女の^{さかずき}大吟醸





nightmare

秘密の森

この世界へ迷いこんだ あの日のように よく晴れた日曜日

彼女は船長を森へ誘った

「あたし、あなたがなくした帽子のうわさを聞きました。森に手がかりがあるのです。」

忘れかけていた誇りのあかし 手に入れることで世界が変わる

彼は少年の頃に感じたような 淡い胸騒ぎがするのだった

二人はそろって その日のうちに 赤いアメ車で町を出た



森は夕暮れ まぐわいのとき

天使のラジオは電波が乱れ あたりはうっすらノイズ音

古ぼけた井戸の前にふたりは立った

美しくなるといふ不思議な水がこの井戸の底にあるという

人魚はしばし その穴へ この身を 放りこんでくれという

別れの予感に戸惑いつつも もとはといえば盗んだつぼみ

彼はしぶしぶ承知した

「せめて なくした帽子の謎を説いていってはいくれまいか？」

言うが早いか 赤い人魚は船長の手をすり抜けた





あたりはすっかり暗くなり 森が秘密をささやく時間
「昔話じゃあるまいし、俺がのぞいて罰^{ばち}が当たるって、そんな古いすじがきでもないだろう。」

月明かりをたよりに おそろおそろ井戸の底をのぞいてみれば
どこか懐かしい匂いが立ちのぼる そのかぐわしさにほころぶせつな

船長は両目をふさがれた



視界を奪われ狼狽^{うろた}えて 足を滑らしたあわてもの

井戸の底へと急降下

「胎内^{うろた}回帰願望は 限りないゼロへの憧れです…」

天使のラジオが 懐かしい異国の電波をキャッチした

古いマシンが起動して 船長の脳が揺らされる

もしかしてだけど この井戸がもうひとつの世界へつながるのでは?

赤い人魚の白い手が卵を割ったシグナルだ

落ちてゆくそのスピードは時間の感覚を麻痺させる

遠く意識に聴こえてくるのは亡者^{もつじゃ}を諭す^{さと}古い唄





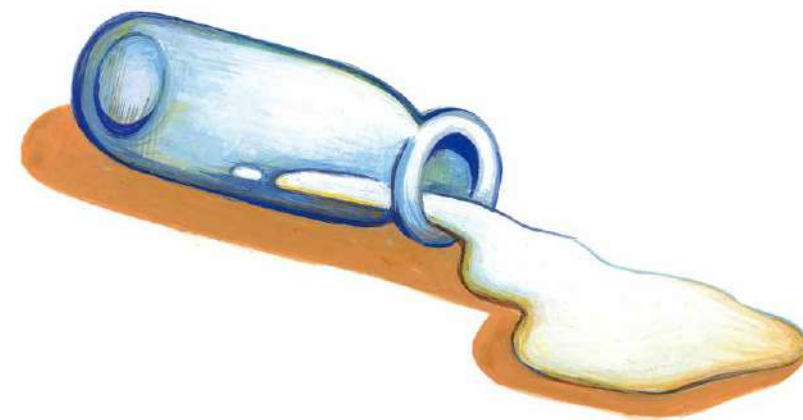
Junction

二人の男

どれくらい時間が経ったのか 気づけば見張塔の中
舞台正面に腰掛けて 俺は日本刀を持っている

赤い人魚が知らない誰かと朝を迎え これから食事という場面
それはキャプテンハットを目深にかぶる 包帯巻きの仮面の男
「貴様が俺の帽子を盗ったのか……。さらに愛しい妻までも。」
ギリシャ悲劇の役者なら 派手な演技の見せどころ
「なにがあっても返してもらおう。さあ、男なら いさぎよく舞台に立つがよい!」

幕が上がった夢芝居 もう誰も こぼれたミルクを嘆かない





向かい合った二人の男 チャリンチャリンと切り結ぶ

男と男の勝負だぜ おのが誇りをしめすとき

やけど
火傷を負ってハンデあり 男はめっぽう弱かった・・・ ザックリ割れる不気味な仮面

「この帽子だけは俺のもの。ふてい不貞の女は捨ててゆく!

俺は船長の威厳を取り戻し、もとの世界に戻るのだ。」

武士のなさを忘れた船長 倒れた男の包帯を解く

まおとこ
「間男め。どんなツラか、みてやろう!」

その瞬間、四方を囲む壁は崩れはじめた



赤い人魚の告白

「あにはからんや 斬^{かたき}った敵は他ならぬ 船長 あなた自身の姿だった
塔はぶざまに崩れ落ち がれきに風が吹き抜ける
みろよ 沖ではあなたの船が痛みに耐えて燃えている
あなたに似合いのキャプテンハット あたしはお役に立てたのかしら
むこうの空から黒い影 ああ なんと美しい声^なで啼くのでしょう」





survivor

帽子の帰還

東の空からやってきたのは 巨大な鳥の女神様
「まあこれは。なんと痛ましい結末でしょう。」
燃えさかる船の災難は 彼女のおっばいで鎮火する
神のいたずら その横顔が神々しくも 悩ましい

生まれた星をはるか彼方に もとの姿に戻った二人
おためごかしの船長に 赤い人魚が悲しく言った
「あなたの迷子の魂は 戻るべき場所を見つけたようだ
産湯のような盃があなたの傷を癒すでしょう
あなたを愛してしまったことで 掟に背いてしまったあたし
あはれ人魚になり損ねました・・・
きっとこのまま永遠に 境界線をさまようでしょう
いいの あたしは 馬鹿な女ね
もとの世界で人々があなたの帰りを待っている
さあ もう一度 冒険の旅へもどるのです」





epilogue

幽霊船長と呼ばれて

深い海の底を泳いでいる とても静かな夢だった
絶え間なく 生まれ続ける ^{いぎょう}異形の俺
禁断の果実が生んだ ^{まつえい}末裔たちは いくつもの海を越え
かつて訪れたあの岸辺に きっと たどりつくのだろう

「ああ、俺たちは何度でも、生まれ変わることができるのだ。」
……そのうち意識がまだらになって
みだらな夢と入れ替わる

ポカンとひとつ ^{つづみ}鼓が鳴って 殴られたように目が覚めた
「俺の夢はマンネリだ! 決まって同じシナリオじゃないか。」

あの日以来 船長はおねしょの癖が直らない
赤い人魚は もう ここにはいない



幽霊船長と赤い人魚

絵と文 隅田信城

2016年11月発行

PROFILE

Nobushiro SUMITA

1973年生

北海道函館市在住

画家・イラストレーター・グラフィックデザイナー

www.sumitaworks.com

